

月刊

2015

7
月号

みんぱく

特集

異種混濁の世界 東南アジア

東南アジアの一日 信田敏宏／靴を脱いでお上がりください 平井京之介

台所のカミさまがいる展示場 榎永真佐夫／ヒジャブがあらわす女性の夢 福岡正太

豊かな影絵芝居 戸加里康子

他者と折り合うユーモア 吉田ゆか子

たんぼ道、女工と僧のすれ違い 平井京之介／先住民の店 信田敏宏

アンサンブルズ・アジア

おとも よしひで
大友 良英

プロフィール
1959年神奈川県横浜市生まれ。
音楽家。即興演奏やノイズミュージック、ポップスまで幅広い音楽活動をおこなう。映画やテレビの音楽も多数手がけNHK連続テレビ小説「あまちゃん」では音楽を担当。2014年より、「音」をとらしてアジア各地域の交流をはかるプロジェクト、アンサンブルズ・アジア（主催・国際交流基金）のアーティスティック・ディレクターを務める。

僕の最初のアルバムは香港から出ているし、最初の映画音楽も中国映画だった。どちらも二〇年以上も前のことだ。当時、日本以外のアジアで、僕がやっているような即興やノイズといった音楽を理解してもらおうのは簡単ではなかった。香港はまだその素地が多少はあったけど、難儀したのは北京だ。初めて演奏したのは一九九四年。千人以上の観客を集めたジャズフェスでノイズ的なギターソロをやらせてもらったんだけど、演奏が終わったとき拍手はほとんどなかった。多くの観客はサウンドチェックをしているだけだと思っただけ。次いで演奏したのが一九九九年。Filamentという起承転結のない極端にミニマルな演奏をするユニットでのコンサートだった。巨大な会場にお客さんはわずか九人。さすがにこれで中国との縁はないだろうと思っただけ。

ところがである。その日の晩、ホテルの部屋に、詩人だと名乗る若者が押し掛けて来た。どうやら演奏にえらく打たれたらしいのだけど、なにぶん言葉が通じない。それでも僕らへの興味と疑問と質問が沢山あって、結局朝まで筆談でコミュニケーションし続けることになった。その彼が、今や中国のオルタナティブな音楽シーンを牽引すると言っても過言ではない即興音楽家のヤンジュンだ。

中国にはその後、何度も行くことになった。ある

とき青島のコンサート企画者が、九四年の北京コンサートのお話をしだした。あんな衝撃的な演奏はなかったし、あれが切っ掛けでわたしは今ここにいます。……そう言いさるのだから、ソウルでも、シンガポールでも同じような経験をしている。最初はほとんど理解されているとは思えない。でも数年後に、あのコンサートが切っ掛けで……と言う若者が必ずと言っていいほど現れる。そんな若者たちが、それぞれの都市と都市を結んでわたしの想像を超えて新しい音楽シーンを牽引している。わたしも今やその波に巻き込まれていると言ってもいいくらいだ。

昨年からは頻りに東南アジアに向かっている。どこに行っても、状況は相変わらずだ。それでも根気よく続けようと思っている。特殊な音楽を広めたいからじゃない。ただ、こういう音楽を必要としている人は少なからずどこにでもいて、そんな人たちが国を超えて繋がるなかで起こす化学反応を楽しみにしているのかもしれない。僕らのやっているような音楽の世界では、人種間や国同士の問題を越えて、インディペンデントなネットワークを草の根的に作る事が日常のようになってきている。そこに希望を見るのも悪くない。こうして「アンサンブルズ・アジア」が始まった。この先、どんな化学反応が起こるのか、誰よりも僕自身が楽しみにしている。

月刊
みんぱく

7月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
アンサンブルズ・アジア
大友 良英</p> <p>特集 異種混淆の世界 東南アジア</p> <p>2 東南アジアの一日
信田 敏宏</p> <p>4 靴を脱いでお上がください
平井 京之介</p> <p>5 台所のカミさまがいる展示場
樫永 真佐夫</p> <p>6 ヒジャーブがあらわす女性の夢
福岡 正太</p> <p>7 豊かな影絵芝居——マレーシアのワヤン
戸加里 康子</p> <p>8 他者と折り合うユーモア——バリ島仮面劇トベン
吉田 ゆか子</p> <p>9 たんぼ道、女工と僧のすれ違い
平井 京之介
先住民の店
信田 敏宏</p> | <p>10 〇〇してみました世界のフィールド
敦煌莫高窟の日々
末森 薫</p> <p>12 みんぱく Information</p> <p>14 味の根っこ
オベ・エウエドウ
緒方 しらべ</p> <p>16 文化遺産おもてうら
危機言語は救えるか
庄司 博史</p> <p>18 音の居場所
多民族の物語を紡ぐ「共同実験室」
——日系三世ノブコ・ミヤモトのパフォーマンス・アート
和泉 真澄</p> <p>20 人間学のキーワード
マイクロクレジット
鷹木 恵子</p> <p>21 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|



特集

異種混濁の世界 東南アジア



二大文明のはざまにあり、大陸部と島嶼部からなる東南アジア。多様な環境で生活を送る人びとに、さまざまなルーツをもつ文化、宗教が入り交じり、多種多様な暮らしが繰り広げられている。今年三月にリニューアルされた展示を中心に、東南アジアの異種混濁の世界を紹介する。



東南アジアの一日



信田 敏宏

民博文化資源研究センター

二大文明のはざままで

中国とインドという大文明のはざまに位置し、その影響を強く受けてきた東南アジア。そこには今も多様な文化と民族が交错し、心躍るような活気あふれる世界が広がっている。

今回の東南アジア展示新構築のテーマとして考えたのは、異種混濁の世界の日常、つまり「東南アジアの一日」である。展示空間を、朝、昼、夕方、夜の四つにわけ、一日という短い時間のなかに展示の品々を盛り込み、その多彩な文化を感じていただきたいというのがねらいである。

一日を味わう

熱帯・亜熱帯の東南アジアは、とにかく暑い。早朝の涼しい

時間、人びとは夜明けと同時に働きはじめる。朝のイメージは、「生業」である。狩猟採集や漁撈、焼畑耕作や水田耕作に関連した道具類に加え、地方農村における近代的労働を象徴する女工を展示している。朝日のなか、いきいきと活動をはじめ人びとの姿を思い浮かべていただきたい。

ぐんぐんと気温が上がリ、昼近くになったころ、人びとは一旦仕事を終え、暑さをしのぐ。昼のイメージは、「村の日常」である。高床の家屋で機織りをしたり、囲炉裏でくつろいだり、ときには冠婚葬祭などの儀礼も催される。家や木陰で昼寝などしながら、のんびり過ごすのは、村ならではののどかな風景である。

日がかたむきはじめ、涼しくなると、人びとは再び活動を始める。夕方のイメージは、「都市の風景」である。展示品は、色とりどりの衣装に身を包んだ人びとが活気あふれる町にでかけ、買い物を楽しむ姿を想起させる。ムスリム（イスラム教徒）女性のベールや先住民の工芸品など、近年東南アジアで注目されているイスラム化や先住民といったテーマもみどころである。

東南アジアの夜は長い。人びとは屋台や露店に集ったり、影絵などを楽しんだり、寺院の境内でゲームや娯楽に興じる。夜のセクション「芸能と娯楽」では、東南アジアの夜がこもしたす妖しい世界も垣間見ることができる。

熱帯に生きる人びとの活気は東南アジア世界を熱く輝かせている。しかし、その日常が意外なほどおだやかでゆったりと流れていることもまた、東南アジアの魅力のひとつではないだろうか。朝のセクションに新しく設けられた「ゆとろぎスペース」に腰をかけ、そんなのんびりした東南アジアの時間の流れをぜひ感じ取っていただきたい。

一日が終わり、夜の空間を抜けたところには、朝焼けに浮かぶアンコール・ワットを描いた絵画が展示されている。「朝陽アンコール」は、洋画家の大熊峻が描いたものである。新しい一日の始まりを象徴するこの絵画も、新しくなった東南アジア展示場とともに、楽しんでいただければ幸いである。





東南アジア展示場にある仏教寺院の再現展示



靴を脱いで
お上がりください



平井京之介 民博研究戦略センター

それで、帰国したときから、みんぱくで寺院を再現する展示がしたいとずっと思っていた。

今回、実現するにあたり、チェンマイ国立博物館館長のニタヤーさんに協力を依頼した。彼女は以前からの知り合いで、仏教美術の専門家である。

寺院の中心はもちろん仏陀像だ。タイらしい、ピカピカの真ちゅう製仏陀像がよいだろう。観客にインパクトを与えるように、最初はなるべく大きなものと考えたが、最終的に一メートル程度のもので選んだ。座って見上げたときに、仏陀像とちょうど目が合うようにするには、コーナーの広さを考えると、これくらいがバランスがよい。仏陀像の国外もち出しにはタイ政府の許可が必要なのだが、これはとても簡単だった。北タイ地域でこの許可を出すのはチェンマイ国立博物館の館長、つまりニタヤーさんだったからである。

苦労したのは、仏陀像を載せる台座の収集である。蓮を様式化したタイ独特のデザインなのは日本で手に入らない。現地ではコンクリートで作りにすることが多く、既製品を売っていない。ニタヤーさんのとりなしで、なんとか展示業者に作ってもらうことができた。

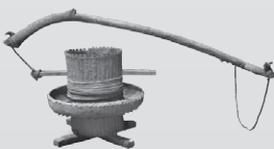


真ちゅう製の仏陀像
標本番号 H0276217

台所のカミさまが いる展示場

かしなが
まさは
お
榎永 真佐夫

民博研究戦略センター



なに族の台所？

東南アジア展示場に、山地民の高床家屋にある台所を再現した。これがなに族のものかといわれると、即答できない。

囲炉裏、火棚、食器棚、調理具類の多くは、ベトナム、タインホア省の白タイの村における収集品である（同じ集団のラオス側にいる片割れが、赤タイを自称しているからややこしい）。しかしそれは、一九九〇年代のディエンビエン省の黒タイの家屋をイメージして配置している。だから囲炉裏端の女性にはラオスのタイ・ワット



「村の日常」セクション、囲炉裏の再現展示

の衣装が着せてある。タイ・ワットはベトナムでは黒タイに分類されるからである。ついでに、女性が腰かけている籐椅子は東南アジア大陸部で民族をこえて広く使用されるもので、囲炉裏の収集地に近い白タイの村で得たから白タイが作ったとは限らない。ザオ（瑶族）やムオンかもしれない。さらに食器棚も、一九八〇年ごろかベトナムの都市部から普及したタイプで、それを器用に真似て現地の村人が組み立てたものだ。



蒸しあがったばかりのおこわを主食にしているタイ系民族は多い。筆者の大好物でもある。2008年、ベトナム、ディエンビエン省



台所のカミさまの依り代

さて、台所で一番大事なものは、五徳の役割を果たす三つ石である。

マイチャウにあるタイ族文化博物館に一時保管していた囲炉裏を取りに行ったときのことを思い出す。館長が「これが一番、大事だよ」と笑いながら、頭陀袋を倉庫から引っ張り出してきて、乱暴にひっくり返した。ゴロン、ゴロンと転がり出したのは、熱と重さに

うまくいったか？

こうしてできた寺院コーナーだが、観客には靴を脱いで上がり、寺院の雰囲気を感じてもらいたい。それには仏具一つひとつにキャプションがあるとならぬ。そこでタッチパネルを設置し、そのなかで展示品を解説することにした。わたしの得度式や修行生活の様子も同時に写真つきで紹介している。

タイ仏教寺院の再現はうまくいっただろうか。その答えは、展示をみたタイ人が、なかへ入って礼拝してくれるかどうかにあるとわたしは考えている。

太古に巨人が、「五徳の三つ石」山(写真中央左寄り)に大鍋をおき、コメを蒸したと伝えられる。2013年、ベトナム、ライチャウ省



一年三六五日耐え続け、何代も家族の生活を守ってきた堅牢な石。そんなもので割れ損じはしない。とはいえ台所のカミさまの依り代である。畏れかしこむべきカミさまへの仕打ちに苦笑した。

展示場で囲炉裏を組み立てるとき、この三つ石の置き方には迷わされた。わたしが知る黒タイの囲炉裏では、手前にひとつ、奥にふたつ、石が配置されている。しかし、収集したお宅では手前にふたつ、奥にひとつだったのである。結局、原状を再現してある。

カミさまへの不敬不遜をお詫びしないままではいけない。オープン前日、わたしは祈禱師に扮し、囲炉裏でお供えをおこなった。東南アジアではカミさまも融通が利くはずと、白タイ式と黒タイ式チャンボンで祈禱したのがカミさまの怒りがあったのか、自宅の台所でタマネギを切る際に、包丁で左手の人差し指を切つてケガした。



ヒジャーブがあらわす女性の夢

隠して魅せる

イスラームの教えにより、他人の前では覆わなければならない体の部位はインドネシアではアウラットとよばれている。女性信者の場合、大体、顔と手以外がこれに当たると解釈されている。ミニスカートやホットパンツ、タンクトップはもつてのほか、スキニーパンツもタイトなドレスも体の線が見えるので、髪型を工夫してみせることもできない。彼女たちには、おしゃれば許されないのか。

福岡 正太 民俗文化資源研究センター



ヒジャーブのインナーであるチブット。このタイプは、その形からチブット・ニンジャとよばれる。2014年、インドネシア、バンドゥン



イスラーム・ファッションのお店にて。中央が筆者。2014年、インドネシア、バンドゥン

じつは、そんなことはない。インドネシアで衣料品の市場を訪ねると、かなりの店が女性イスラム教徒のファッション、特に髪を覆うベール（ヒジャーブあるいはジルバブ）や関連する小物を扱っている。ショッピングモールには、人気のイスラームファッションブランドの店が並ぶ。ベールは、女性を縛るものかと思ひ込んでいたが、女性イスラム教徒としての自分をファッションナブルに表現する手段でもあるようだ。

敬虔に、そしておしゃれに

今、インドネシアの若い女性のあいだで、ヒジャーブズ・コミュニティという団体が注目を集めている。ベールをおしゃれに着こなす若い女性を中心とした集まりだ。二〇一〇年にジャカルタで設

立された。彼女たちは、次々と新しいベールの巻き方を工夫して、それをビデオに録って動画配信サイトで公開したりしている。ほかにも、クルアーンを読む会や各界で活躍する女性の講演会なども開いている。一方、ヒジャーバーズママという、お母さんたちを中心とするグループもある。こちらは家庭をもちながら活躍する女性のファッションを発信している。

イスラームの教えを守りながら、現代インドネシアにおける女性の生き方を探り、インターネットなどのメディアを通じて情報発信を続ける。敬虔かつ有能で、ファッションナブルに自分を表現する女性、彼女たちの活動からは、そうした理想の女性イスラム教徒の像が浮かんでくる。みんながそんな女性になれる訳ではないかもしれないが、それは多くの女性に現代社会を生き抜くための夢を与えているのだろう。



「都市の風景」セクション、インドネシアとマレーシアのベール。マネキンも現地のもの

豊かな影絵芝居 —マレーシアのワヤン

戸加里 康子

東京外国語大学非常勤講師



夜は影の世界

影絵芝居ワヤン（正式にはワヤン・クリ）という、インドネシアを思い浮かべる方が多いかも知れない。しかしじつはマレーシアにも同じ名前の同じような芸能がある。マレーシアではおもに

半島東海岸北部、タイと国境を接するクランタン州を中心とした地域で演じられてきた。

クランタン州の州都コタバル、夜九時。ワヤンの上演小屋には、白いスクリーンが貼られ、色鮮やかな人形の影が映し出されている。真ん中には団扇のような形のポホン・プリンギン。その両脇には「矢の神」とよばれる一対の人形が向かい合い、ポホン・プリンギンの後ろに仙人マハリシが控える。

前座の音楽が終わると、すべての人形がスクリーンからとり払われ、その後再びポホン・プリンギンが映し出される。影は、左右に大きく振られ、揺れ、ワヤンの世界が始まる。ポホン・プリンギンが消えると、マハリシがゆっくりとあらわれ、しばらく歩いた後、真んなかで止まる。そして呪文を唱える。

オーム、オーム、シーシー。プラーシーデイツ……この呪文、じつはマレー語ではない。演者はタイ語だと思うというが、タイの人に訊いても意味はわからないという。上演に使われることばは、おもにクランタン方言のマレー語だが、ワヤン独特の言い回しがあり、ジャワ語やタイ語の単語も多く混じる。

芸能は交流で豊かになる

クランタンのワヤンは、ジャワから伝わったという説とタイから伝わったという説がある。碑文



上：クランタンのワヤンはこのシーンから始まる。2008年、マレーシア、コタバル
下：「芸能と娯楽」セクションに展示されているマレーシアのワヤン人形

や文献が残っていないため、歴史についてははっきりとしたことはわかっていない。研究者はさまざまな論拠を挙げるが、演者たちはそれほどこだわっていないように見える。彼らのあいだには「クランタンのタイ系住民がジャワからもち返って始めた」という折衷案のような伝承も伝わっている。

伝承の真偽のほどは確かではないが、この地域に伝わる他の芸能と同じように、交易などで伝わった近隣（ときには遠方）地域の文化や芸能を柔軟に受け入れ、クランタンのワヤンは豊かに発展してきたのだろうと思う。そしてこれからもそうあって欲しい。



白いスクリーンに影を映し出して物語を演じる。2013年、マレーシア、コタバル



他者と折り合うユーモア

吉田 ゆか子よしだ ゆかこ
日本学術振興会特別研究員(民博)
民博 外来研究員

ムスリムを演じる

バリ島のヒンドゥー教寺院の祭りで、友人のワヤンさんが演じる仮面劇を観ていたときのこと。中盤のコメディシーンが始まると、イスラム帽をかぶったワヤンさんが快活な伴奏曲にのって登場した。彼はおもむろにひざまずき、大げさにイ



イスラム教徒を演じて客の笑いをとるワヤンさん。2010年、インドネシア、バリ島

スラム風の祈りのしぐさをした。ヒンドゥー教儀礼の真つ最中に、イスラム教の祈りをあげるという少々どぎついギャグに、観客たちは少しの驚きを交えながら、笑い声をあげた。

バリは、インドネシア共和国に属する小島である。バリの人口の約八割はヒンドゥー教徒であるが、国全体では約九割がイスラム教徒である。そんなバリのヒンドゥー教徒にとり、イスラム教徒とは、国内で圧倒的な影響力をもち、日常生活のさまざまな場面でもかかわらずにはおれない異教徒である。

異種混淆のトペンの世界

この仮面劇はトペンとよばれ、ヒンドゥー教の各種の儀礼において、そこに集う神々、人間の参拝客、そして悪霊たちを楽しませるために上演される。軸となるのは王や大臣など歴史上の英雄たちの物語である。時代劇であるが、中盤以降は、時事問題や現在の村のゴシップなどがコメディとして盛り込まれる。壮麗な王族貴族の歴史物語と生活感溢れる現代の話題を付き合わせ、そのギャップを楽しむ。こうして儀礼の場に、過去と現在、祖先の世界と我々の世界が交錯するダイナミックな空間が開かれるのである。



外国人観光客の役を演じる。2007年、インドネシア、バリ島

外国人観光客の姿はバリの日常の風景の一部となっているが、彼らも恰好のトペンの題材だ。演者は誇張した高い鼻の仮面をつけ、きよろきよろと辺りを見回し、英語なまりのつたないインドネシア語でナンセンスな物言いをする。米国人研究者ジェンキンスも指摘するように、バリの人びとは、圧倒的なかたちで迫ってくる西欧諸国の影響を、トペンのなかで笑い飛ばし、歴史のなかに消化することで対処してきた。現在、政治的・経済的利害が対立することも多いインドネシアのイスラム教徒とヒンドゥー教徒。その緊張関係のなかで試みられるイスラム教徒の道化もまた、ユーモアをもって彼らとなんとか折り合ってゆく、その方法の模索といえよう。

たんぼ道、女工と僧のすれ違い

平井 京之介ひらい きやうのすけ
民博 研究戦略センター

タイの田舎のたんぼ道。車が一台やつととおれるくらいにのびのびの広さである。朝七時前、出勤途中の若い女性が修行僧の一人に会う。列をなして歩く修行僧たちは托鉢へいくところだ。鉢をもって近隣の村々を歩き、家の前に立つ村人から施しの米やおかずを受けてまわる。

女性は日系の組立工場で働いている。工場は自宅から二〇キロほど離れた工業団地内にある。彼女が乗るバイクは、タイで人気が高いホンダ「ドリーム」。その名のとおり、農村の若者にとっては「夢」の乗り物である。彼女はこれを二年ローンで買い、月々返済している。向こうから僧がやってくるのに気づいた彼女は、その手前で脇に寄ってエンジンを止め、乗っていたバイクを降りた。僧を先におすためだ。



東南アジア展示場入口にある「女工と托鉢(たくはつ)僧」の展示

これにはふたつの意味がある。ひとつは敬意を示すこと。もうひとつは確実に接触を避けること。

僧が女性に触れることは戒律違反。触れたら最後、それまでの修行の成果が水の泡になるそうだ。

先住民の店

信田 敏宏のぶた としひろ
民博 文化資源研究センター

近年、東南アジアの先住民は、NGOなどの支援を得て、従来は儀礼や日常生活で使用してきた手作りの腕輪やかごなどを、観光用の商品として市場などで販売するようになった。

マレーシアの先住民オラン・アスリの工芸品は、以前から観光客用のショップで売られているが、その売り上げのほとんどは、仲買人の懐に入ってしまった。制作者の収入は少なかった。二〇〇〇年を過ぎたころ、事態は次第に変化するようになる。

一人のマレー人女性が立ち上げた「グライ・オラン・アサル(先住民の店)」というNGOの協力の下、工芸品を制作したり、このNGOを通じて自らの作品を販売しようとする人びとがあらわれたのである。仲買人の役割を担うNGO「先住民の店」は、利ざやを一切受けとらず、売り上げのすべてを制作者の元に届けられるようにした。

こうしたNGOの活動は、工芸品の制作者の家計を支えるだけでなく、工芸品制作への若い世代の参入も促しており、伝統技術の継承にも寄与する活動になっている。



工芸品イベントで店を出すNGO「先住民の店」。2005年、マレーシア、クアラランプル





朝陽を浴びる敦煌莫高窟



壁画の保存修復について学ぶ筆者（左から2番目）



土産物屋で働く友人。のちにガイドに転身した



敦煌



文化遺産と暮らしてみよう

写真：莫高窟警備員との夜宴（左から2番目が筆者）

〇〇してみました世界のフィールド

敦煌莫高窟の日々

すえもり かおる
末森 薫 民博 機関研究員

古代シルクロード文化の様子を伝える敦煌莫高窟。信仰の場として受け継がれ、今では保護や観光の対象として、多くの人を集める。ときの流れとともに行き交う人びとの様子を眺めてきた洞窟は、ただそこにたたずみ、人びととつながり続ける。

中国甘粛省の西端にある敦煌は、東西文明をつなぐシルクロードの要衝として、古くから人びとが行き交う場所であった。敦煌の街から東南に二五キロメートル離れた砂漠のなかに、世界遺産としても有名な敦煌莫高窟が存在する。南北一六〇メートルにわたる崖面に、五〇〇近くの洞窟が穿たれ、そのなかには彩色豊かな仏教の壁画や彫像が残される。

わたしは、二〇〇七年五月から九月にかけて、東京文化財研究所と敦煌研究院が共同で実施した「敦煌壁画の保護に関する日中共同研究」に研修生として参加する機会を得て、四力月のときを敦煌莫高窟で過ごした。

朝、太陽が昇ると、東を向く崖面に光が反射する。その光景を眺めながら、ラジオ体操の音源に合わせて体を動かすのが日課であった。昼間は国内外から訪れた大勢の観光客で溢れかえる洞窟を横目に、壁画の保存修復をはじめとして敦煌莫高窟で取り組まれる多方面の活動について学んだ。洞窟が閉じられる夕方を迎えると、潮を引いたように人びとは去り、静寂のときが訪れる。夜には、月や星の明かりのなかに潜む洞窟の気配を感じながら、友人たちと夜のひとときを饗した。

この日常を繰り返すなかで、短期的に訪れるだけでは知ることのできない文化遺産と人びとのかかわりを知った。悠久の歴史をもつ敦煌莫高窟の周辺では、文化遺産を護る人びと、文化遺産と生きる人びとが、さまざまな営みを繰り返していた。

文化遺産を護る人びと

敦煌莫高窟の研究および管理を一手に担う敦煌研究院では、職員がそれぞれの専門を活かして、文化遺産の研究や管理、保存に携わっている。敦煌出身の者もいるが、中国各地から、敦煌へと導かれてきた者も多い。

文化遺産の保護にあたる専門家は、敦煌莫高窟に忍び寄りさまざまなリスクと向き合い、その対策を講じている。たとえば、砂漠から運ばれる砂は、洞窟のなかの壁画や彫像を痛める大きな天敵となる。洞窟の上部では、植物やネットを駆使して、砂が洞窟に入るのを防ぐ試みが進められる。

また連日訪れる観光客の管理も大きな課題である。その対策として、一般に開放する洞窟の制限や同時に入れる人数の調整がおこなわれるほか、湿度や二酸化炭素濃度などをモニタリングし、洞窟内の環境を随時確認している。そして、種々の劣化の症状が見られる壁画や彫像に対して、適切な方法を検討したうえで保存修復作業が進められる。彼らの取り組みに、終わりはない。

文化遺産と生きる人びと

他方、レストランや土産物屋の従業員、清掃員、警備員、観光ガイドなど、文化遺産に関係する多様な職につく人びとと敦煌莫高窟の周辺で大勢出会った。地元の人びとにとって文化遺産は生きる糧でもある。

二〇一四年一月、調査で久々に敦煌莫高窟を訪れ、研修中に出会った人びとを探して歩いた。まずは、滞在したホテル、三食を賄ってくれたレストランを訪問したが、オーナーをはじめ、知っている従業員は、誰もいなかった。当時と変わらぬ景色を眺めながらも、ときの流れを感じた。

しばらく歩みを進めると、見知った姿が目に入った。以前ホテルとレストランを切り盛りしていた彼は、洞窟の近くにある売店のオーナーへと転身を遂げていた。彼が作る懐かしの料理を食べながら、共通の知り合いの近況を聞いた。土産物屋で物売りをしながらガイドを目指していた友人はその夢を叶え、各地からやってくる人びとを連れて、敦煌莫高窟に通っているという。当時とは立場や職を変えている者が少なくなかったが、その多くはやはり文化遺産と関係した生活を営んでいる。

敦煌莫高窟での日々から教わったことは、文化遺産が、過去の芸術や歴史、宗教観を現在に伝える存在ばかりではなく、現代に生きる人びととつながり存在するということだった。この経験から得た感覚は、その後の研究活動や文化遺産の周辺に生きる人びととの関係を築くうえでの大きなよりどころになっている。

特別展
「韓日食博——わかちあい、おもてなしのかたち」

五感で味わう韓国と日本の「食」文化。体感できる新しい「食」の展覧会です。両国の食文化がユネスコ無形文化遺産に登録されるなど「食」に関する文化的な関心が高まるなか、日韓外交正常化50周年を記念して、韓国国立民俗博物館と共同で開催します。

会期 8月27日(木)～11月10日(火)
会場 特別展示館

企画展

「岩に刻まれた古代美術——アムール河の少数民族の聖地シカチ・アリヤン」
極東ロシアに暮らす先住民民族ナナイの村落であるシカチ・アリヤン村の岩壁画について、拓本と写真を使って世界で初めて一斉に紹介します。

会期 7月21日(火)まで

躍動する南アジア——春から秋のみんなくフォーラム2015
新しくなった南アジア展示にあわせて、その躍動感あふれる姿を、さまざまな関連イベントを通して紹介します。

■関連イベント
◆夏休み子どもワークショップ
「キラキラ カラフル インド布——フィールドワークに挑戦!」

日時 8月1日(土) 10時30分～16時
(集合10時20分)
場所 ナビひろば、本館展示場
※要事前申込、定員12名、参加費500円、申込は定員に達し次第受付終了

「はじめの一步 やつてみようミラー刺繍」
日時 6月～8月の毎週木曜・土曜
13時30分～16時30分(16時まで受付)
場所 本館エントランスホール
プログラム
①ミラー刺繍の仕組み(参加無料)
②スパニールをつけてみよう(参加費50円)
※申込不要、小学生から大人まで(小学3年生以下は保護者同伴のごと) 刺繍初心者向け

◆みんなく映画会
インド映画特集

現代インドを表現する各言語によるインド映画を、インド研究者による解説付きで4回にわたって上映いたします。

7月20日(水) 祝
「フランドリー」
7月25日(土)
「カーンチワラム——サリーを織る人」
8月2日(日)
「Mr.&Mrs. アイヤル」
8月8日(土)
「DDLJ——勇者は花嫁を奪つ」
各回13時30分～16時30分(開場13時)
ただし、8月8日(土)のみ13時～16時30分(開場12時30分)

会場 本館講堂(定員450名)

※申込不要、要展示観覧券、先着順(整理券は配付いたしませんので、ご注意ください。)
※各日11時30分より南アジア展示場にてミニレクチャーあり、8月8日(土)のみ11時から

◆展示場クイズ
「みんなQ」南アジア編
日時 7月23日(木)～8月25日(火)
会場 本館南アジア展示場

みんなくミュージアムパートナーズ
「点字体験ワークショップ」
日時 7月11日(土) 12時～15時30分
会場 本館エントランスホール
※参加無料、申込不要

台湾光点計画講座
「台湾客家文化を学ぶ」
日時 7月11日(土) 13時～16時45分
会場 本館5セミナー室(定員90名)
※申込不要、参加無料、先着順
お問い合わせ先
河合洋尚研究室
kawahironao@dc.ninpaku.ac.jp

連続講座
「みんなく×ナレッジキャピタル—世界の「民芸」—」

好評につき大阪・梅田のナレッジキャピタルで連続講座の第2弾を開催!
時間 19時～20時30分
会場 グランフロント大阪北館1階 ナレッジキャピタル「カフェラボ」
※要事前申込、参加費500円(1ドリンク付き)、定員各回50名
主催 国立民族学博物館
一般社団法人ナレッジキャピタル
7月1日(水)
講師 印東道子(本館教授)
メイド イン オセアニア—素材を活かした機能美
7月8日(水)
講師 鈴木七美(本館教授)
アメリカン・キルトの世界—キルトのある生活、キルトインテグする人びと
お申込み・お問い合わせ先
一般財団法人ナレッジキャピタル
06・6372・6530

ナレッジキャピタル
「地球探究紀行」
みんなくの研究者が驚きと感動をお届けします。世界の文化の奥深くへ一緒にどこぞで

時間 13時～14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」
※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、参加費各回1000円
主催 産経新聞社、近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
7月8日(水)
チヨコレートの故郷—メキシコで中央アメリカ講師 鈴木紀(本館准教授)
7月22日(水)
武器をアートに—アフリカ・モザンビークにおける平和構築
講師 吉田憲司(本館教授)
お申込み・お問い合わせ先
ウエーブ産経ナレッジキャピタル係
06・6633・9087

●夏休み観覧無料キャンペーン
夏の観覧無料キャンペーンを8月1日(土)から8月25日(火)まで実施します。対象は高校生以下と65歳以上の方です。

●ネパール大地震の情報ポータルサイト
人間文化研究機構の現代インド地域研究国立民族学博物館拠点では、4月25日に発生したネパール大地震関連の情報を集積したポータルサイトを立ち上げました。
URL http://www.ninpaku.ac.jp/nhu/indiasnepal/earthquake2015_j.html
※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

巡回展「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」
会期 8月23日(日)まで
休館日 毎週月曜日
(ただし、月曜日が祝日の場合はその翌日)
会場 郡山市立美術館(福島県)
主催 郡山市立美術館、国立民族学博物館、千里文化財団

みんなくセミナー

時間 13時30分～15時(13時開場)
会場 本館講堂
定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)
第446回 7月18日(土)
大陸中央の末端へ—パキスタンの山奥で言語を探す
講師 吉岡乾(本館助教)
ヒトの移動やくらしの中心は平地です。生活世界の「端っこ」といつのは何も、陸地の縁の海に面した部分ばかりではありません。山奥もまた、「端っこ」になりつつもまた、「端っこ」の最たるひとつでもある。世界の屋根と呼ばれる地域では、どういった人ひとがどのような言葉話しているのでしょうか。



ウルタル峰とバルティット城砦

みんなくウィークエンド・サロン
研究者(話者)

時間 14時30分～15時30分
※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が来館された皆様の前に登場します! 「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多岐。

7月5日(日) 本館ナビひろば
シカチ・アリヤンの岩壁画の成立年代と日本の縄文時代
話者 佐々木史郎(本館教授)
7月12日(日) 本館ナビひろば
インドの新しいファッション
話者 杉本良男(本館教授)
7月19日(日) 本館ナビひろば
インドのお手伝いさん——女性家事労働を考える
話者 松尾瑞穂(本館准教授)
7月26日(日) 本館ナビひろば
言語から歴史を読み解く——南アジアを例にして
話者 吉岡乾(本館助教)

刊行物紹介

■ヌカ・K・ゴッツフレッセン 作・画、
沢広あや 訳、岸上伸啓 監修
『極北の大地・グリーンランドの夜明け——THE FIRST STEPS』
清水弘文堂書房 3,000円(税抜)

グリーンランドに人類が初めて足を踏み入れた4500年ぐらい前の時代の生活を描き出したグラフィック・ノベル。本書は、デンマーク国立博物館の考古学者が情報を提供し、それをもとにイヌイットの漫画家ゴッツフレッセンが描いたもの。

■杉本良男 著
『スリランカで運命論者になる——仏教とカーストが生きる島』
臨川書店 2,000円(税抜)

仏教とカーストが生きる島スリランカでのさまざまな調査経験を通じて、次第に現地の社会文化に引き込まれて行った人類学者の軌跡を詳細にたどり、その後の南インドでの経験についても述べている。

■浜田明範 著
『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐる』
風響社 3,600円(税抜)

生物医療(病院で行われているタイプの医療)が先進国のように普及していないと思われるアフリカにおいて、「意外にも身近な存在となっている薬剤や健康保険。その実態を起点に、医療と人間・社会の関係を逆照射する野心的な論考。

国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716
<http://www.senri-f.or.jp/> E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会(大阪)
時間 14時～16時
会場 本館第5セミナー室
※当日先着順、会員無料(会員証提示)、一般500円
第445回 8月1日(土)
インドを彩る日本のタイル
——インド近代化遺産のもつひとつの物語
講師 豊山亜希(現代インド地域研究国立民族学博物館 拠点拠点研究員)

日本でも最近耳にする文化遺産のあらたな概念「近代化遺産」。インドではいま、イギリスの植民地支配の記憶を伝える多様な「印洋」折衷建築の再評価が進んでいます。それら建築を彩るタイル自体、衛生観念の浸透とともに普及した近代化のシンボルです。植物文様やヒンドゥーの神がみを表した色彩豊かなタイルの多くが、じつは日本で製作されました。この小さな「文化遺産」を手がかりに、激動の近代史に隠された日本とインドの交流の足跡をたどりま。

●講義と併せ、懇談会をおこないます。
第446回 9月5日(土)
日韓の汁文化と発酵食品
講師 福留奈美(お茶の水女子大学専門食育士)
●講義と併せ、発酵調味料等の味わい体験を含むワークショップをおこないます。

東京講演会
会場 JICA地球ひろば セミナールーム600
定員 60名(要事前申込、会員無料、一般500円)
第113回 8月23日(日) 14時～16時
食の歳時記——ベトナム、黒タイの村から
講師 榎永真佐夫(本館准教授)
山がちな西北ベトナムには、地形や高低に応じてさまざまな民族が住み分けて暮らしています。盆地で水田をつくっている黒タイは、モチ米が主食です。彼らの食卓は、季節の移り変わりに応じ、素材の特性を活かしたさまざまな旬の食材で豊かに彩られます。講演会では黒タイの食を歳時記風にとりあげ、そこからモノ、習慣、信仰、近隣の民族との関わりなど、彼らの生活の実相に迫ります。

●講義と併せ、懇談会をおこないます。

味の根っこ

ナイジェリアの激辛ネバナバシチュー オベ・エウエドゥ

おがた 緒方 しらべ 日本学術振興会特別研究員（九州大学）
民博 外来研究員



オベ・エウエドゥ（右）と、ヤムの粉末を餅状にしたアマラ（左）。
2014年2月10日

辛さは世界レベル

辛い料理といえば、タイやメキシコがよく連想される。しかし、西アフリカの料理もかなり辛いことはあまり知られていないかもしれない。日本でも最近よく食べられるようになったメジャーなエスニック料理に比べると、サハラ砂漠以南のアフリカ料理はごく限られたレストランでしか味わえないので、知名度が低いのは無理もないだろう。

西アフリカのナイジェリア、とりわけ西部のヨルバの人びとの料理は、日本人の感覚からすると激辛だ。主食のイモに、肉や魚と野菜を煮込んだシチューをあわせたものが定番である。豆ご飯や炊き込みご飯に肉や卵を添えたワンプレート料理もポピュラーだが、ともかくどれも激しく辛い。

辛さの源は「ペペ」のよび名で親しまれている唐辛子、スコッチ・ボネットだ。日本で一般的な「鷹の爪」に比べて、丸くふんわりとした可愛らしい容姿とは裏腹に火傷を負わせる辛さを孕む。そこにフルーティな香りが絶妙に溶け込んだペペは、料理に欠かせない。

ネバナバは日本と同じ

ペペの辛味に加え、ネバナバ感も大変好まれる。ナイジェリア西部では、ペペとトマトをベースにした基本のシチューにオクラやモロヘイヤをスープ状にしたものを組み合わせる。鮮やかな緑が粘る透明の糸とともに赤いシチュー風だしは食料品店に必ず並んでおり、約六円（約五グラム）から手に入る。日本の食品企業「味の素」も一九九一年よりうま味調味料「アミノモト」を、二〇一〇年からはナイジェリアのシチュー向けの洋風だし「MaDish」を販売しているほど需要は高い。

とはいえ、洋風だしの到来以前より西アフリカで生産されてきた調味料も使われる。ナイジェリア西部では、イルとよばれる発酵したアフリカイナゴマメ（ヒロハフサマメノキの種子）が使われ、それは魚介や動物、昆布や椎茸のだしとはどこか違ううま味を生み出す。風味は日本の干し納豆に少し似ている。イルは小さなビニール袋に詰められ、ナイジェリア西部ではもっぱら女性が切り盛りする八百屋で一袋約六円で売られる。土地の水と空気にふれ、煮炊きと発酵に三日以上かけてできるイルは、シチューに格別のうま味をもたらす。シチューにまつわる諺は南部だけでも七つ以上あるといわれるが、このことから、シチューはナイジェリアの郷土料理といえるだろう。

辛くない食べ物も

そんなオベ・エウエドゥを、しかし、ナイジェリアで慣れ親しまれた味と言い切るのは難しい。あと五年もすれば人口は二億人に達するとされるナイジェリアにおいて、その半数以上を占める低所得者層の人たちは、このような食事をいつもとれるわけではないからだ。彼らの毎日の



ペペ（スコッチ・ボネット）は包丁で細かく刻むかフードプロセッサーにかけられる。2009年11月1日

に入り交じり、見た目も栄養も抜群だ。日本人なら、メカブや納豆とよく似たこのネバナバに親しみを覚えるだろう。

そんなモロヘイヤ入りのシチュー、オベ・エウエドゥは、ナイジェリア西部の家庭料理のひとつである。主食はたいてい、ヤムイモないしキャッサバの粉末を熱湯でこねて餅状にしたもの。これを手で一口サイズにちぎりとってシチューにくぐらせ、ネバナバと長く引く糸を一、二回空中でささっと巻きながら口もとに運ぶ。アツアツとピリピリはネバナバとあいまって、喉の向こうへつるりと降りては腹をふくらませていく。

洋風だしとアフリカイナゴマメ

味は野菜のうま味と塩、そして即席洋風だし食べ物、ガリという最安値で手に入るキャッサバの粗い粉。これに若干の砂糖を加え、水にひたして「飲む」。オベ・エウエドゥが一食八〇円だとすると、ガリは二〇円ほどでとりあえず腹を満たしてくれる。できたてのオベ・エウエドゥの食感とうま味を堪能しつつも、辛くもなく粘りもしないものを毎日飲む人たちには、また別の慣れ親しんだ味があることも忘れたくない。



アフリカイナゴマメを発酵させた調味料、イル。
2008年9月10日



ナイジェリア西部の八百屋。手前右からトマト、パプリカ、タマネギ。左奥（タマネギの後）にイル、その右隣にペペ、女性の左手の横にモロヘイヤ、その隣はヒユ科の野菜。
2008年8月12日

で整えられる。「クノール・チキンコンソメ」「マギー・ブイヨン」という私たちに馴染み深いあの味である。こうした化学調味料入りの洋

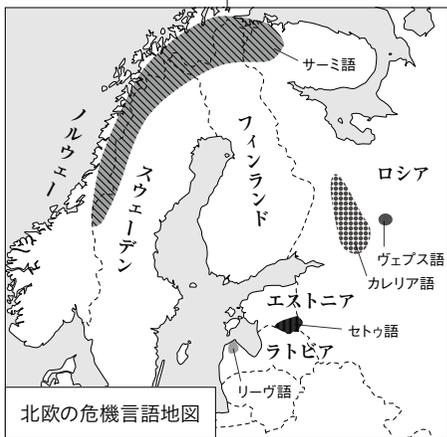
オベ・エウエドゥ (4人分)

タマネギ 大2個
ペペ 5~10個 (同量程度のハバナロまたはこれ以上の鷹の爪で代用可)
トマト 大3個
パプリカ 2個
トマトピューレ 50g
モロヘイヤ 100g
洋風だし 2個/袋 (10g)
イル 1袋 (約40g)
塩、水 適量
パームオイル 大さじ3~5 (サラダ油で代用可)

- ① タマネギ、ペペ、トマト、パプリカをフードプロセッサーにかけ、
 - ② トマトピューレ、パームオイルを①に加えて中火で15分ほど煮込む。コンソメと塩で味を調えたら、これがペペとトマトの基本のシチューとなる。
 - ③ モロヘイヤの葉の部分だけをフードプロセッサーにかけ、それを沸騰した湯で5分ほど煮立たせる。
 - ④ 水で洗ったイルと塩を③に加え、さらに5分ほど煮る。
 - ⑤ 皿に④をよそい、その上から②をかける。
- * お好みで、肉や魚を②に加えて長めに煮込むとさらに美味しくなる。主食は、ヤムやキャッサバの代わりにマッシュポテトや白飯（餅米）でもよい。
- * ペペやハバナロの摂取量は個人によって許容範囲が大きく異なるので、注意が必要。
- * イルはアフリカ食品店で手に入ることがあるが、日本で代用できる調味料はない。

危機言語は救えるか

しょうじ ひろし
庄司 博史 民博 名誉教授



北欧の危機言語地図

ある言語の話者が少なくなったり、ユネスコがとりうるもつとも効果的な保護措置は、無形文化遺産リストへの記載であろう。無形文化遺産の典型である口頭伝承は、個別の言語によって担われるからだ。

危機と向かうウラル諸語

わたしはフィンランド語のほかに、同じウラル語族に属するサーミ語やカレリア語、エストニア南部のセトゥ語ともかかわってきた。いずれも母語話者は数万から数千に過ぎず、今日いわゆる危機言語といわれているグループに入る。エストニア語の方言であるセトゥ語をふくめ、他の言語も話者は国家の主要語であるノルウェー語やフィンランド語、ロシア語へ急速にシフトしつつある。フィンラン

ド湾周辺には同じ系統のヴェプス語、リーヴ語などがあるが、話者数は数十人から数人で、まもなく死語になることが予想されている。

ウラル系の言語は二〇余りあるが、それらのほとんどは継承者が年々減少しつつあり、これらの研究者は、言語の将来への存続に常に危機感をもって接してきた。安泰といわれるのは、国家をもつフィンランド語、エストニア語とハンガリー語ぐらいなのだ。

ウラル系の言語は二〇余りあるが、それらのほとんどは継承者が年々減少しつつあり、これらの研究者は、言語の将来への存続に常に危機感をもって接してきた。安泰といわれるのは、国家をもつフィンランド語、エストニア語とハンガリー語ぐらいなのだ。

言語の危機から人の危機へ 今日、存続の危機に瀕しているのは、もちろんウラル系言語に限らない。世界中で話者が急速に減少しつつある諸言語の窮状が指摘されはじめたのは、一九八〇年代末からだ。言語の減少は普通、より有力な言語へ話者が乗り換える言語交替によっておこり、必ずしも人が消滅しているわけではない。しかしそれを民族の消滅、そして個々の言語に支えられてきた世界観や知識の消滅として危惧す

る人は少なくない。たしかに今まで通じていた民族語が次第に目の前から消えはじめたことに痛みをおぼえ、祖先の智慧や文化が言語とともに消え去ることを嘆く人がいるのは理解できる。近年、個々の言語の盛衰を環境生態学と結び付ける試みをおして、その危機意識を広め、今まで特に言語問題に関心なかった一般人の共感をよぶきっかけになった。一九九二年、リオデジャネイロで開催された地球サミットで「生物多様性条約」

が採択され、人びとの関心が生物の多様性を温存する環境に向かうことになった。まもなく生物の多様性は言語の多様性ともつながることになり、少数言語にやさしい環境は、そこに住む生物、つまり人類をとりまく環境の指標と受けとめられるようになった。

多くの報告書が発表された。世界中で消滅しようとする言語の救済策がいくつも提言され、それまで言語構造の記述に没頭していた研究者のなかにも突如、環境生態論を論じはじめたものもいたほどだ。

救済のための方策 一九九〇年代半ばから世界中で危機言語関連のシンポジウムや調査プロジェクトが始まった。日本でも膨大な研究助成金を背景に調査プロジェクトが組まれ

多くの報告書が発表された。世界中で消滅しようとする言語の救済策がいくつも提言され、それまで言語構造の記述に没頭していた研究者のなかにも突如、環境生態論を論じはじめたものもいたほどだ。

る。他にもヘルシンキ大学のヤンネン氏は東アジアの、サルミネン氏はロシアからヨーロッパにかけての諸言語の状況に詳しく、担当地域の危機言語リストは今日ユネスコの世界危機言語地図(二〇〇九年)に掲載されている。このリストには日本からもアイヌ語と八丈方言のほか、沖縄語、八重山、宮古など琉球の六方言(言語)が危機言語として認定されている。わずかに残るこれらの言語の話者から言語アーカイブが採集され、継承のための方策が、地元や本土、外国の研究者を中心に練られている。



年に一度のセトゥ民族祭。祭りの規模は大きくなるが若いセトゥ語話者は減少しつつある(2005年、エストニア、ミツ)



フィンランドでは1970年代にサーミ語教育が始まり1980年代にはサーミ語で全科目の授業も可能になった(1989年フィンランド、ウツヨキ)



20年前10代のカレリア語話者はすでに珍しくなっていた。夏休みに祖父母の村に帰省した子どもたち。話すのはロシア語のみ(1996年カレリア共和国、シェーメイエルビ)

危機言語のこれから

危機言語が認識され、その救済を人類の存亡や民族、個人の尊厳と関連付けて論じられるようになったのは、それほど古いことではない。それまでは何千、何万という言語が地上には生まれ、また消えていったのは間違

いない。ことばの存続に命をかける人がいる一方で、母語が消滅することに気づかず、苦痛も感じない人びとが大半なのも現実である。多くは異言語話者との通婚や同化政策を背景に主流言語に乗り換えているが、最終的には話者の言語選択によるものである。しかし選択を迫られていること、選択肢の存在さえ知らずに進むのが普通だ。そして多くの場合、現実的な選択肢は、存在しない。危機言語の救済は言語学者が考えるほど単純なことではない。

多民族の物語を紡ぐ「共同実験室」

—日系三世ノブコ・ミヤモトのパフォーマンス・アート

時代を経るにつれ変化し、より複雑化していくアメリカの文化・民族的状況。それらを紡いでいこうとする日系三世ダンサーの活動は、パフォーマンスのもつ力を再確認させてくれる。



右からノブコ・ミヤモト、PJ・ヒラバヤシ（サンジョセ太鼓）、藤本容子（鼓童）の3人のコラボレーション「トライアングル・プロジェクト—タンポポの旅—」

ロサンゼルス郊外のサウスセントラル地区。静かな住宅街の一角に浄土真宗西本願寺派洗心寺がある。外からは寺とわからないが、敷地内には大きな仏壇と装飾を備えた本堂、図書室やセミナー室、日本の小学校の講堂を彷彿とさせる「ソーシャルホール」がある。中庭にはゴクラクチョウカ、フェンスの外にはヤシの木が並び、明るい陽射しとともにそこが南カリフォルニアであることを思い出させる。

リトル東京と異なり、洗心寺を訪れる日本人は多くない。檀家はロス周辺に住む日系人が大多数で、毎日曜日に法要と日曜学校、仏教の勉強会がおこなわれる。だが、寺の施設は、陶芸教室、和太鼓、雅楽舞楽など日本風の文化活動の他、各種ダンス教室、料理教室、さまざまなジャンルの音楽の練習やリハーサル、パフォーマンス・アートの稽古場としても利用され、平日の夕方や土曜日にはアフリカ系、ラティノ、ヨーロッパ系、そしてムスリムなどさまざまな民族や宗教の人びとが寺を賑わせる。洗心寺は北米和太鼓のパイオニア「緊那羅太鼓」の活動拠点でもある。

新しい「お盆ソング」

カリフォルニアの日系寺院は七月にお盆を

おこなう。洗心寺でも大きな駐車場の中心に櫓が組み立てられ、メインイベントの「盆おどり」がおこなわれる。そこにはあらゆる年齢層の日系人だけでなく、近所に住むアフリカ系や日頃ソーシャルホールを利用するさまざまな民族・宗教の人びとが集まり、輪になって踊る。

一九八五年、この寺から英語のお盆ソングが生まれた。なかでも「Yijo」「Garden」「音頭」などを手掛けたのは日系三世のノブコ・ミヤモトである。同じく三世の洗心寺住職マサオ・コダニ開教師が、「炭坑節」や「福島音頭」など日本の曲に加え、日系人の生活体験を反映した曲と踊りが必要と考えて制作を依頼したのだ。歌詞には日本語と英語が混じり、メロディーもミヤモト独特の感



ファンダンゴお盆 (FandangObon) の歌い手たち

性をあらかずジャンル化できないものだ。新しい振り付けと音楽は、リトル東京の日系文化会館 (JACC) 前の中庭で、他の寺からも大勢が参加して披露された。

二〇一四年一月、JACCには再び盆踊りの輪ができた。しかし今度のお盆ソングは、和太鼓や笛、三味線だけでなく、ジェンベなどを伴ったアフリカの音楽とダンス、そしてタップダンスとハラナで奏でられるチカーノ音楽と歌も含まれていた。その名も「ファンダンゴお盆」。メキシコ系の「死者の日」と「お盆」を組み合わせたイベントであった。今回の仕掛け人はノブコ・ミヤモト。「もったいない」をテーマに、わたしたちと地球と祖先あらゆる生命との関係を、人種を超えてひとつの輪になって考えようという企画だった。

ハリウッドから多文化な舞台へ

パフォーマンス・アーティストのノブコ・ミヤモトは、一九三九年にロサンゼルスで生まれた。太平洋戦争中は収容所生活を体験し、戦後にプロのダンサーとなった。映画『王様と私』『ウェストサイドストーリー』などに出演、ミュージカル『フラワー・ドラム・ソング』のリードダンサーもつとめた。しかし六〇年代末にベトナム反戦運動、黒人運動などとかかわるようになり、ニューヨークでユリ・コウチヤマらとアジア系アメリカ人運動を展開。チャーリー・チン、クリス・イジマとともに、アジア系アメリカ人の体験をフォークソングにして歌い、多くの若者



BYOC (Bring Your Own Chopsticks) のビデオで、割り箸おぼけに扮するミヤモト。映像は Youtube で見ることができる

を運動へと導いた。

アジア系アメリカ人アーティスト・カンパニーとして一九七三年にグレートリープを立ち上げたが、一九九二年のロス暴動をきっかけに、多文化な舞台を制作するようになった。9・11同時多発テロ後にはアラブ系やブラックムスリムの人びととのコラボを実現し、最近の数年間には地球環境をテーマに、音楽、踊り、歌を巧みに組み合わせた「Bring Your Own Chopsticks (マイ箸をしよう)」「Your Own Chopsticks (マイ箸をしよう)」「Mottainai (ゴミを減らそう)」「Cycles of Change (自転車に乗ろう)」といったビデオを制作している。

ミヤモトの周りにはいつもさまざまな民族・宗教、芸術ジャンルのアーティストが集まる。そこから紡ぎ出される音楽は、必ずアーティスト自身の物語が含まれている。若者の自己表現をアートのレベルまで高め、同時に他のコミュニティへとつながる気づきを促す「コラボラトリ」プロジェクトも開始から一〇年になる。まもなく喜寿を迎える彼女の活動は、まさに次世代の活動家アーティストを養成する「共同実験室」なのである。

和泉真澄

同志社大学教授

新自由主義経済のグローバル化のなかで、今や、拡大する経済的格差をどう是正するかは、世界的な重要課題のひとつとなっている。「マイクロクレジット（以下、MC）」は、貧困層の経済的自立や底上げを目的とした無担保少額融資のことである。

一九七〇年代後半にバンングラデシュの経済学者ムハマド・ユヌス博士が考案体系化し、一九八三年、MC専門の銀行、グラミン銀行を創設した。この銀行のMCがとりわけ画期的であったのは、まずすべての人間には返済能力があると信じて、まさにクレジットの本来の意味である「信用」に基づいて、それまでは融資対象とみなされてこなかった貧困層を対象に融資したことである。従来の銀行では、借り手は富裕層の特に男性、担保有りの大口融資、銀行での窓口業務、融資額の使途は借り手次第であったとすれば、グラミン銀行では融資対象は貧困層の特に女性、無担保での小口融資、行員が出向く業務、融資目的は収入創出活動に限定、さらに五人一組での連帯保証制での週ごとの少額返済と、前者とは正反対の手法を採用したのである。それにもかかわらず、MC融資への返済率は一〇〇パーセントに程近く、また多くの借り手がその後貧困状態から脱出したことから、世界的にも貧困削減の効果的手段として注目されることとなった。

今日ではMCは世界三〇カ国以上に広がり、また融資に加えて、貯蓄や送金、保険などの多様な金融サービスを提供するマイクロファイナンスへと発展してきている。特にITや携帯電話の普及により、従来はアクセスが困難であった僻地へもサービス

マイクロクレジット Microcredit

鷹木 恵子 桜美林大学教授

信用を見直す

人間学の
キーワード

がより容易に届けられるようになり、また単に貧困層や女性だけでなく、障害者や移民・難民など、さらに戦後復興や被災地再建や旧社会主義国の資本主義経済への移行にもその効果が期待されるようになっていく。

ただし、MCの融資をすれば、直ちに貧困削減の効果があると考えるのは短絡的で、実際にはそれぞれの国や地域の社会的経済的また文化的実状に十分適した融資プログラムをいかに設計するかが、もつとも重要な鍵となる。融資機関の限られた財源をいかに有効に貧困削減へと結び付けるのか、そのために借り手をどのように選択し、融資額や利率、返済期間や回数、個人融資が集団連帯制での融資か、助言やモニタリングをどうおこなうかなど、MCの設計は千差万別であり得る。また貧困削減と同時に融資機関自体の財政的自立や健全性、持続発展性をいかに確保し両立させていくかは決して容易な問題ではない。貧困層へのMC融資は一般的に返済率が高いため、貧困層をターゲットに暴利を貪る悪徳MC融資業者の出現や、融資機関の乱立に伴う多重債務者の問題など、モラルハザード（倫理的な退廃）を招きかねないリスクもある。

しかしまた融資の借り手自身がおこなうビジネスが、環境問題の解決や地域活性化など何らかの社会貢献につながる「ソーシャルビジネス」という新しい概念も提唱されるようになり、利潤最大化を目指す経済とは異なる、もうひとつの連帯経済の模索や社会的価値の創造を目指す動きも、目下、広がりを見せてきている。

編集後記

梅雨入りした。日本の雨はしとしとと物静かである。大学院生時代にシンガポールでのシンポジウムに参加し、東南アジアを初めて体験した際、ほぼ毎日、夕方になるとザーッと大雨が降って、サツとやんだ。「これが世に言う熱帯のスコールか!」と当時は感激したのであるが、厳密には暴風を伴わないので、「スコール」とよばないらしいということを知った。

「新構築」とよばれる展示リニューアル作業も、いよいよ今年度が最後となる。現在、中央・北アジアとアイヌ展示場の実施設計が佳境に入っている。11月から来年の3月までは、例年どおり、これらの展示場が一時閉鎖される。永年親しんでいた展示風景もあと半年限り。特に、非常に正確に作られているアイヌの10分の1景観民家模型は撤去されてしまうので、ぜひ夏休みに見納めにご来館ください。

福島県の郡山市立美術館では、巡回展「イメージの力」が6月27日に開幕する。東京、大阪での特別展ほどの規模ではないが、選りすぐりの約360点が再登場。東北にみんぱくパワーをお届けします!

(山中由里子)

●表紙:人形劇ファン・コレックの木彫り人形 民族:スンダ 地域:インドネシア
標本番号:H0229624ほか
新しくなった東南アジア展示「芸能と娯楽」セクションに展示中

次号の予告

特集

テーマパーク

みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引に比べ、「月刊みんぱく」や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます(特別展示は観覧料割引)。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいあります。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893/平日9:00~17:00)

月刊みんぱく 2015年7月号

第39巻第7号通巻第454号 2015年7月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 池谷和信
編集委員 山中由里子(編集長) 河合洋尚 菅瀬晶子
丹羽典生 丸川雄三 南真木人 吉岡乾
デザイン 宮谷一欵 長岡綾子
制作・協力 一般財団法人千里文化財団
印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<http://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<http://twitter.com/MINPAKUofficial>

